

と。即ち要するに飛び放れた所から着想せよといふのである。去來は「旅寢論」にこれを一片の見解にすぎぬと掛して、「曲輪の内を捨得まじき事は自後に思ひ知られなん」と言つてゐる。去來の論は誠に正論である。誠の名吟佳什は曲輪の内外などに拘はる筈はない。しかし實際の句作上新意を得るためには、許六の論は最も適切だと言はねばならない。さうしてこの句などは、去來も曲輪の外から合せた佳句の例としてあげてあるが、卯の花の句としては實際清新な趣に富んでゐる。卯の花が垣根にほのく／＼と白い夜明、芦毛の馬に跨つて旅立つさまは、誠にすが／＼しくも勇ましい。「去來抄」には去來もかつて「有明の花に乗込む」とまで案じて、下に月毛駒・芦毛駒では言葉がつまるし、の文字を入れると口にたまつていろ／＼思ひめぐらしても遂に成らなかつたが、許六のこの句を見て大いに感じたと言つてゐる。なほ同書には中七が「月毛の駒の」となつてゐるが、それは去來の記憶の誤であらう。尤も句としてはどちらでも大したかはりはない。

初秋や親に離れし相撲とり (東華集)

初秋に逞しい力士を思ひよつたのは、例の曲輪を出た案じ方であらう。

十團子も小粒になりぬ秋の風 (本朝文選)

この句はなほ「韻蹇」・「續猿蓑」・「陸奥千鳥」・「鏞鏡」等の諸集にも見え、許六の句中最も名高いものである。彼自身も頗る得意な句だつたので、「本朝文選」の直指傳中に、彼が江戸で始めて芭蕉に見えた時、宇津山での吟だと言つてこの句を示すと、芭蕉は大いに驚いて「今わが腸は見抜かれたり」と歎じたと言つてゐる。さうして芭蕉はのち嵐蘭

に許子はわが血脈をとゞむるものだと言つたといふ事迄吹聴してゐる。十團子は駿河國宇津の山の名物で、昔は鶴の中から一掬ひに必らず十箇づゝ掬ひ上げたので、この稱があつたのだといふが、後には糸に十箇づゝ團子を貫いて賣ることになつた。その名物の團子もこの頃では世智辛くなつたせわか、以前に比べると餘程小粒になつたといふので、その佗びしい感じに秋風の蕭殺たる音がびつたりと響く。寸分の間隙もそこにない。それはこの句が小粒の十團子と秋風との單なる取合せでないからである。その両者が十分作者の主觀の中に融和されて後に發してゐる。所謂取合せも實はかくして始めて自然の調和を保ち、藝術としての完成を得るのである。要するにそれは作者の主觀的統一——語をかへれば作者の藝術的心境の統一如何によるといはねばならぬ。

相撲とりの紅裏深し秋袷 (篇突)

この句は華やかなやうでさびて居る。目に力士の紅裏の着物を見ながら、それが秋の寂しさを觀する心の中に、融化されてしまつてゐるからである。

食堂の鐘を聞き知る男鹿哉 (渡鳥)

山深い禪利のさまが想はれる。

瓦焼く烟にむせて鳴く鶉 (横平樂)

深草あたりの土器焼く烟が聯想される。彼自身の所謂曲輪の内に得た句のやうであるが、和歌をはなれた俳趣が十分味はられる。

欄干にのぼるや菊の影法師 (本朝文選)

直指傳の中に先師滅後の句で、今一人もこの句の脇を聞く人がないと歎じた句が、八句あげてある。その中の一つだ。しかしこれなどは只王安石の詩句「月移花影上欄干」の翻案にすぎぬやうだ。

大髭に剃刀の飛ぶ寒さ哉 (韻塞)

この句の生命は「飛ぶ」といふ言葉にある。顔も埋まる程の大髭を、こそ〜と剃り落す剃刀の刃が白く光る。全く飛ぶといふ感じだ。寒さがそれで骨身に沁んで来る。

旅 宿

大名の寝間にも寝たる寒さ哉 (小文庫)

「韻塞」の旅の賦(本朝文選)にも出てゐる)を併せ讀むと句の興趣が一層深い。本陣などに泊つた寒夜の情である。

新薬の屋根の雫や初時雨 (韻塞)

薬屋の雨の音はすべて一種の雅味をもつたものであるが、新薬を傳ふ初時雨の雫は、わけても俳味が深く感ぜられる。

血のつきし鼻紙寒き枯野哉 (青蕨)

悪い句ではないが初心らしい句だ。寒さうなすごさうな物ばかり取合せてあるから、すぐその感じは受けとられるが、含蓄や深味やはない。

茶の花の香や冬枯の興聖寺 (草笈)

興聖寺は宇治川のほとりにある禪寺である。この句も茶の花、冬枯、興聖寺と道具建てが少しくど過ぎるが、これは全く客觀的に敘してあるので、例へば「茶の花に冬枯さびし興聖寺」などいふのより、句にゆとりがついて居る。しかしこれも決して上乘の句とはいへない。初心に分り易くて難の無い句といふにすぎない。

凡 兆

凡兆は野澤氏、春花園の別號があり、また初めは加生と號した。加賀金澤の人で醫を業とした。芭蕉に師事して元祿三年去來と共に「猿蓑」を撰んだ。罪——藥種の密輸入だといふ——に座して獄に投ぜられ、爲めに師友との交りも絶えたが、間もなく出獄して晩年は野坡・土芳等と往來してゐた。正徳四年歿す、享年不詳。彼の句は印象の鮮明な客觀的描寫にすぐれ、蕪村の句風に酷似して居る。それで子規が蕪村を稱した時代には、凡兆もまた其嵐につぐ作家として俄かにその聲價を高めたが、彼はその作家生活が短く、且つ晩年の句は頗る平弱に流れて、また往年の精采を認めることが出来ない。しかし元祿の俳壇に於いてはとにかく異色ある作家であつた。その妻羽紅尼もまた俳諧をよくした。凡兆の句は今知り得るもの合計百三十二句にすぎず、且つ句集とても別に編纂されたものはない。今直接古俳書から抄出して左に評釋を加へることにした。

野馬に子供遊ばす狐哉 (猿蓑)

子供は人間の子供である。化かすのでなく遊ばすといふので、長閑なそして平和な情趣が生じて来る。

鶯や下駄の齒につく小田の土 (同上)

雪解の田の畦道を歩いて居ると、どこからか鶯の聲が聞えたといふのである。下駄の齒につく土といふのに、早春の感じを十分盡して居るのは、凡手の言ひ及ばぬ所である。

越より飛驒へ行くとして籠の渡りの危うきところへ道もなき山路にさまよひて

鶯の巢の樟の枯枝に日は入りぬ (同上)

大樹の梢が高くかゝつた鶯の巢が見えて、その向ふに夕日が沈んで行く。深山の物恐ろしい景の中に、枯枝に照り返す晩暉の光が、悲壯な美しさを感じさせる。凡兆がかうした客観句に於て、すぐれた直観力をもつてゐた事は、どの句を見ても分るが、特にかうした特殊の詩材を取扱ふに至つては、元祿の俳壇に彼をおいて他に人がないと言つてもよす。

花散るや伽藍の樞落し行く (同上)

「伽藍の曇たそがる」となどと言はないで、大きな扉の樞を落して行くといふ客観的描寫に、夕べのさまをあらはしたのが巧みである。ゴトンと落ちる樞の音が静かな庭に大きく聞えて、櫻がハラ／＼と散る。

灰捨て、白梅うるむ垣根哉 (同上)

表の垣根に灰を捨てに出た。とそこに白梅の花がうるんだやうに咲いてゐたといふのである。「灰捨て、白梅うるむ」といふのは、灰を捨てたために白梅がうるんだといふ意に聞えるが、それほど嚴重な因果關係に解しては句の味

ひが淺くなる。垣根に捨てた灰がバツと細かく飛び散る。その薄い灰色の烟を背景として、白梅の真白な色が目に入るのである。「うるむ」といふ言葉がその時の白梅の感じを、どんなに適切に言ひあらはして居るであらう。「うるむ」と句の表に言現はすまでには、自然を見る心が深くはたらいてゐなければならぬ。

あけぼのや葦かたぶく土龍 (千鳥掛)

細かな觀察だ。しかし「あけぼのや」の上五がやゝ大きく背景を描きすぎて、全體と調和しない感じがある。

若草にくちばし拭ふ鳥哉 (曠野後集)

春光の煦々たるさまが句面に横溢して居る。例へば凡兆を寫真師に見立てる。彼がカメラを向ける位置、シャットをしぼる瞬間、それがどんなに寫し入れるものゝ面目を眞に發揮すべく、最も適當な時と所とを巧みに鋭く選び得たか。この句を見て彼が客観句のすぐれた作家であつた事は、何人もすぐに首肯するだらう。

市中は物のにほひや夏の月 (猿蓑)

店から店と軒を並べた市中の、むせるやうな物のにほひ。肉の匂、果物の匂、脂の匂、汗の匂、そんなものが入雑つたむし暑さの中に人はうごめいて居る。だが目をあげると空には涼しい月影が、地上の熱鬧を知らぬげに照つて居るといふので、感覺的なそして印象の鮮やかな句だ。

渡りかけて藻の花のぞく流哉 (卯辰集・猿蓑)

小川の土橋を渡りかけて、ふとそこに咲いてゐる藻の花に氣づいて、のぞいて見たといふ即興的な句である。

白雄は「俳諧寂菜」に「道の邊の清水流るゝ柳陰しばしとてこそ立止りつれ」の和歌を引いてゐるが、成程一寸似よつた趣がある。しかし作句の態度が全く即興的だから、たとひこの和歌から想を得たとしても、いやに風流がつた所がなく、輕妙な感じがある。

鴉鳴くや入日さし込む女松原 (蕪囊)

女松の赤い肌に秋の夕日が赤々と射して、百舌鳥が爽かに高鳴く、誠に凡兆獨擅の句境である。

灰汁桶の雫やみけりきりぐす (同上)

人は寢静まつて夜もやゝ更けた。今迄ポト／＼と滴つて居た灰汁桶の雫もいつの間にか止んで、その静けさの中にきり／＼とが鳴き出した。秋夜の閑情が深く味はれる。

肌寒し竹切る山の薄紅葉 (同上)

青い竹の肌がひえ／＼として、山にはもう薄紅葉がして居るといふので、この句は色彩から来る細かな感覺を捉へて居る。

初潮や鳴門の浪の飛脚船 (同上)

初潮は八月十五日の満潮をいふ。その満潮の鳴門を矢のやうに走る飛脚船、渦を卷く波の頭が船先に白く碎けて月は物凄く程明るく照つてゐる。なほ初潮は必しも仲秋に限らず、一般に八月頃の満潮にもいふが、この句の場合は名月の夜景に見た方が、一層情景を鮮明にすると思ふ。但し晝間の景と解した所で、決して差支へはないのである。要

禪寺の松の落葉や神無月 (同上)

するに満潮時の鳴門を渡る飛脚船の男性的壯美がこの句の中核をなすので、月の光はそれを更に美化するだけである。禪寺の庭に松の落葉が散りしいてゐる初冬の景である。禪寺といへば同じ寺でも特に閑靜らしい。松の落葉も落花のやうな艶味は全くない。それが初冬の薄ら寒い感じとすべて調和してゐる。しかしそれだけあまりに人爲的な俳諧手段が加へられてゐる感じもするが、あの許六の「茶の花の香や冬枯の興聖寺」などに比べると、すつと自然らしさがある。その松の落葉の上をふむ冷やかさが、しんみり感ぜられる。

門前の小家も遊ぶ冬至かな (同上)

冬至の日は昔は一般に業を休んで祝つたので、寺院でも衆僧に一日の暇を與へるならはしであつた。蕪村にも「書記典主故園に遊ぶ冬至かな」の句がある。で句はその寺の門前の小家まで今日は遊んでゐるといふので、寺の冬至のさまを側面から敘したやうな作である。門前の小家を拈提し來つて、一山閑靜の狀を打出するともいはいうか。巧みな手法といはねばならぬ。

しぐるゝや黒木積む屋の窓明り (同上)

「積む屋」は「積める屋」の意である。軒先近くまで高く薪を積み上げた家の中は、何だか薄暗く陰鬱である。たゞ明り通りの窓から、鈍い光りが一筋ものうく差し込んで居る。外には淋しい時雨の音。まづかうした景情である。實は私は以前この句を全く夜の景と解してゐた。さうして作者は黒木積んだ家の窓から洩るゝ灯影を、外部から眺めて居

る景色だと思つて居たのである。時雨の中に黒くしよんぼりと立つた家、その家の窓からぼつかりと黄色く洩る、灯影、まるで油繪のやうだ。さう解することに今も私は多少の執着を持つてゐる。しかし窓明りを窓の灯と解することは、言葉として無理である。どうしても窓からさし込むあかりでなければならぬ。従つて句の解も作者が家の内部に居るものと見なければならぬ。

下京や雪つむ上の夜の雨 (同上)

この句については「去來抄」に名高い話が出てゐる。まづそれを抄出しておかう。

この句始めに冠なく、先師をはじめいろ／＼と置き侍りて、この冠に極め給ふ。凡光あさ答へて未だ落ちつかず。先師曰く、汝手柄にこの冠を置くべし。もし勝るものあらば、われ再び俳諧を言ふべからずとなり。去來曰く、この五文字の善き事は誰々も知り侍れど、この外にあるまじとはいかでか知り侍らむ。この事他門の人聞き侍らば腹痛く、いくつも冠置くべし。その善しと置かるゝものは、また此方にはをかしかりなんと思ひ侍るなり。

即ちこの句の「下京や」といふ五文字が、いかに苦心の末に置かれたかといふ事が分る。謙抑な芭蕉の言葉としては受取れぬほど、幅つたい事を言つてゐるのも、芭蕉がどれほどこの五文字を置き得た事に會心の笑を洩らしたかと思はれる。それでは「下京や」の五文字が何故それ程までに貴いのか。「去來抄」にはそれについて具體的な説明は少しもしてない。箇中の消息は、所謂以心傳心で解する外はないからであらう。だがある點までは、考察を進めて説明する事は不可能ではない。それは前にも述べた句の調和といふ點に立脚した考察である。凡光によつて先づ案ぜられたのは、「雪積む上の夜の雨」といふ十二字であつた。そしてこれだけで一つ一つの客観的な景色は完全に、現はされて

居るのである。この上更に加ふべき事は、この景色から感ぜられ得べき情趣——即ち句ひを、はつきりと句の中に定める手段である。さてこの雪が眞白く降りつんだ所へ、夜になつて雨がサラ／＼と降りそゞぐといふ景色は、清く涼とした感じに柔らかな温か味が加はつて居る。上品でそしていくらか艶な所がある。

こゝまで考察を進めたら、讀者は「下京や」の五文字が、どうしてこゝに冠せられたかと分るであらう。隨つて實は芭蕉の言も、たゞさういふ工夫を十分門人に悟らせるために、故らにあゝした事を言つたので、決して漫然たる自負の言ではない事が察せられる。要するに巧みなそして親切な指導法であつたのだ。

長々と川一筋や雪の原 (同上)

凡光の句の印象が鮮明な事は、この句などで最もよく代表されてゐるだらう。見渡す限り白皚々として一物の目を遮るものもない廣野、そこに只一筋の流れが遙かあなたから野を横ぎつて長々と黒線を劃してゐる。この大景をよくもかほどまで直截明快に敘し得たものだと思ふ。客観詩人としての凡光の腕の冴えを思はせる。たゞ現代人には句の描寫があまりに平淡で、複雑味がないのが物足りなく感ぜられるかも知れない。

古寺の簀子も青し冬構 (同上)

この句も色彩から来る感じが主となつて居る。すべてが黒く古びた色で塗り潰されてゐる中に、簀子だけ清新しく青々としてゐるのが、際立つて目につく。そしてその簀子に冬構の支度が象徴されたやうに見えるのである。前にあげた「竹切る山の薄紅葉」にしてもこの句でも、青竹の肌色に主として作者の感覺がはたらいて居る。

住吉や河掘添へて春の海 (百曲)

これは彼の晩年の句である。同じく客観山でも頗る平弱に傾いて、「猿蓑」時代の清新さは殆んど見られない。次に「荒小田」等に見える彼の後年の句を少しあげて見よう。

- 眞似をして霞をかくす嵐哉 (荒小田)
- 夕顔のあとから登るむぐら哉 (同上)
- 村雲や今宵の月を乗せて行く (同上)
- 刈株の蕎麥も心や秋のかぜ (鋪鏡)
- 老の手の籠に劣るや山清水 (百曲)
- 雲雀鳴く下は桂の河原哉 (荒小田)
- あばら屋の戸のかすがいよなめくじり (同上)

最後の二句の如き、往年の彼ならば決してこんな平凡な叙し方では満足しなかつたらうと思ふ。その他の句に至つては、これがあの鬼才凡兆の作かと怪しまれるくらゐである。

(第九回配本)

昭和五年十二月十日印刷
昭和五年十二月廿日發行

第六編四冊の内
(非賣品)

國文學講座

全十二冊の内
俳句俳文評釋

編輯者 受驗講座刊行會

右代表者 加藤雄策

印刷者 濤川薫
東京市麹町區下六番町一〇

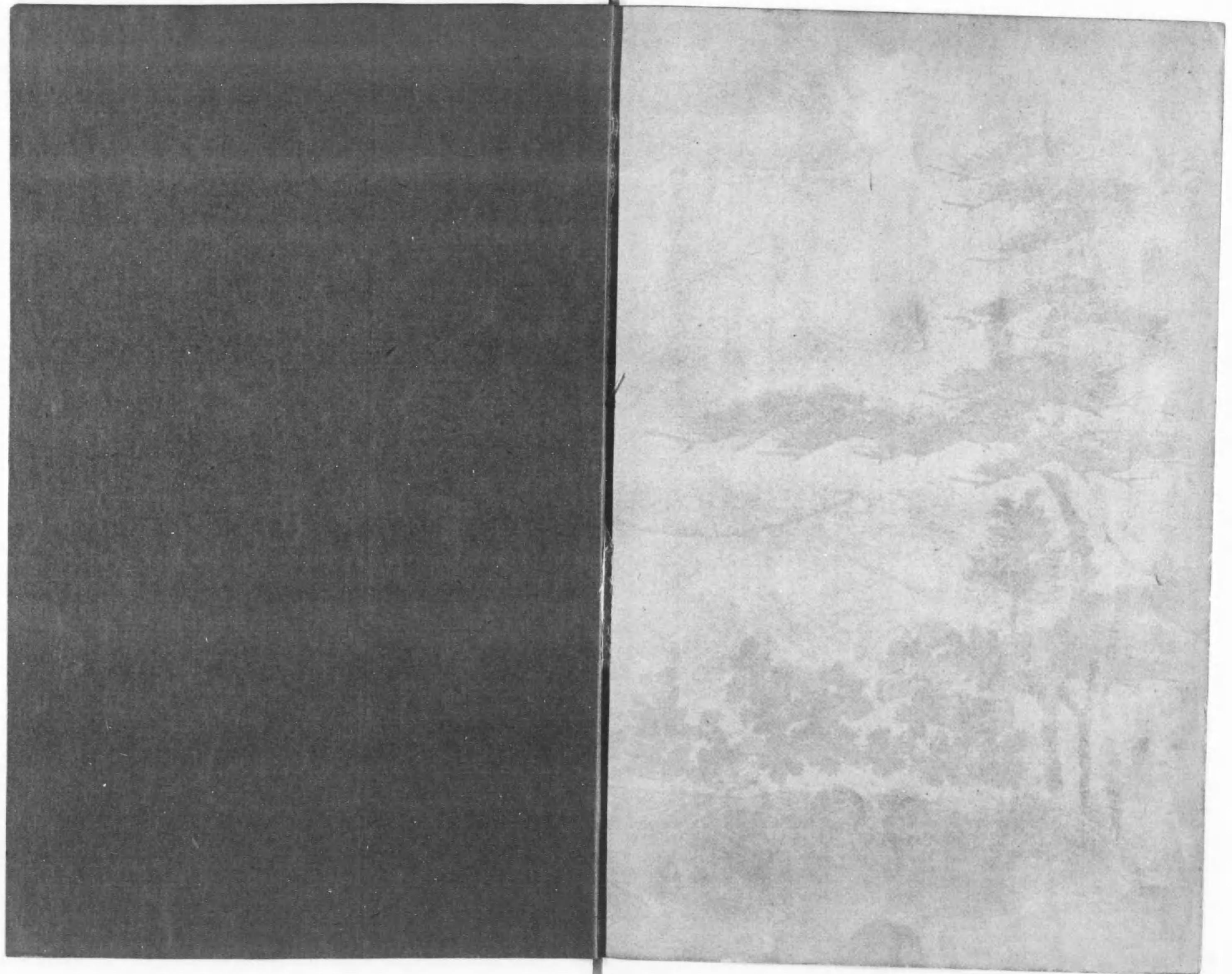
發行所

東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内

受驗講座刊行會

振替口座東京二九六三九番

株式會社平凡社印刷部印行



601
12

終

